

沖代地区条里跡(Ⅱ)

福島遺跡東入垣地区(Ⅱ)

1996年度 中津地区遺跡群発掘調査概報(Ⅸ)

中津市文化財調査報告 第18集

1997

中津市教育委員会



例　　言

- 一、本書は中津市教育委員会が1996年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。
- 二、調査は1996年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び1996年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。
- 三、調査団の構成は下記のとおりである。
- 四、調査主体 中津市教育委員会
調査責任者 高橋 忠隆（中津市教育委員会教育長 平成9年1月31日まで）
前田 佳毅（ 同 平成9年2月1日～）
調査指導 貢川 光夫（別府大学名誉教授）
小田富士雄（福岡大学教授）
後藤 宗俊（別府大学教授）
甲斐 忠彦（大分県立宇佐風上記の丘歴史民俗資料館学芸課長）
真野 和大（ 同 調査課長）
調査事務 麻川 尚良（中津市教育委員会市民文化センター館長）
田中布由彦（ 同 係長）
富田 修司（ 同 主任）
調査員 清水 宗昭（大分県教育庁文化課主幹）
調査担当 高崎 章子（中津市教育委員会市民文化センター主任）
花崎 徹（ 同 技師）

上記の他、村上久和氏（大分県教育庁文化課主査）より現場にて有益なご助言、ご指導を頂いた。記して謝意を表する。

- 一、遺物整理は秋吉三和子、岩崎弘子（中津市歴史民俗資料館）が行った。
- 二、字図復元作業は金丸孝子、中野温子、中島二三恵（中津市歴史民俗資料館）が行った。
- 三、遺構、遺物の実測、トレース、写真撮影は高崎、花崎が行った。
- 四、本書の執筆、編集は第一章、第三章を花崎、第二章を高崎が行った。

一、現場作業は以下の皆さんの協力による。

辻原霞、寺内勝美、湯口ヒロ子、植山トミ子、小倉真理、長岡久美子、神崎文子、黒川みゆき、草野郁雄、黒川洋美、辛島雅美、植山京子、松本歎、植山松枝、今永キク子、植山ヨシカ、徳永賀子、出原文子、中利代、山縣信夫、泉貞世

目 次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 沖代地区条里跡 (II)	
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査の概要	
(1) 知原地区	2
(2) 居屋敷地区	2
3. 沖代条里的概要	6
4. 近年の調査と今後の展望	6
第3章 福島遺跡東入垣地区 (II)	
1. 調査に至る経緯	9
2. 調査の概要	11
(1) 弥生時代	12
(2) 古墳・奈良・平安時代	13
(3) まとめ	14
図版1 沖代地区条里跡	15
図版2 ノ	16
図版3 福島遺跡東入垣地区	17

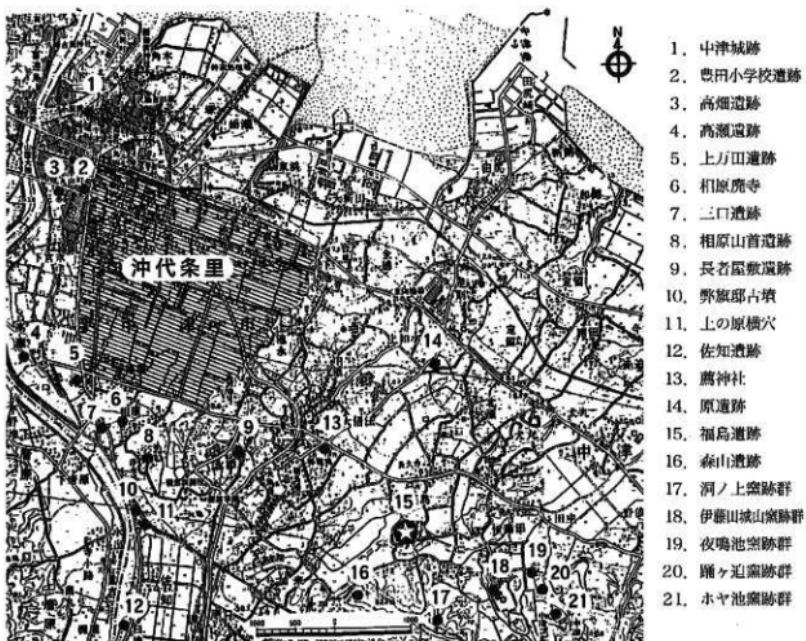


図1 中津地方主要遺跡分布図

第1章 地理と歴史的環境

大分県の北部、人口68,000人、市域面積55.67km²を有する中津市は、県北の中核都市である。市の西側は山国川を境に福岡県と接する。中津市の地形は、沖代平野と洪積台地、通称、下毛原台地とに大別される。ここで中津地方の主要遺跡を概観してみることにする。

旧石器時代の遺跡は、多くを語る資料はない。

縄文時代の遺跡は、ほとんどが洪積台地上に分布している。代表的な遺跡としては、高畠遺跡、棒塙遺跡、入垣貝塚などが知られる。

弥生時代の遺跡は縄文時代と分布を同じくする。また、山国川の自然堤防上にも分布する。代表的な遺跡は、福島遺跡、佐知遺跡、豊田小学校遺跡などがある。

古墳時代の遺跡は台地上に墓地が分布し、自然堤防上や微高地に集落が分布する。墓制にかかるものとしては、上の原横穴、弊旗部古墳、相原山首遺跡などがある。また丘陵上には野依伊藤山窯跡群が立地する。この窯跡から生産された須恵器質瓦は、古代寺院で知られる相原廃寺への供給関係が確認されている。

白鳳から奈良時代にかけての遺跡は、沖代条里、長者屋敷遺跡などがあげられる。長者屋敷遺跡は下毛郡衙の一角ではないかと思われる。沖代平野に条里遺構が展開したことにより、現代に至るまでの恩恵は計り知れないものがある。

中世の遺跡は主に犬丸川流域に分布する。

第2章 沖代地区条里跡(II)

1. 調査に至る経緯

中津市の西半分をしめる沖代平野には古代より施行された沖代条里の地割りがひろがる。現在も水田として利用されている部分では方面の地形をたどることができるが、近年開発の波におされ、急速にその姿を消しつつある。中津市教育委員会では国庫補助を受け、開発に先立ち発掘調査を実施してきた。今年度は知原地区と居屋敷地区的二ヵ所を調査した。以下、それぞれの調査の概要を述べ、最後にまとめとして近年の調査の成果とあわせて沖代条里を概観し、調査の今後の課題と展望を提示したい。なお、以下の2地区の位置は図7を参照されたい。

2. 調査の概要

(1) 知原地区

現地は沖代条里のほぼ中央に位置し(図7の④)、現在畑地と水田として利用されている。共同住宅が建設されたことになったため、発掘調査を実施した。調査区は条里の里界線をよこぎっており、大蛇跡確認が期待されたが、境の水路が現在使用中であるため発掘を断念した。

調査は重機により2本のトレンチを設定して行った。調査区は地下水位が高い強湿田で、上層を除去すると地山である白色粘土層の上に黒色土層が一部残存していた。黒色土には白磁小片や土器師小片が散見され、中世の水田の旧耕作土と思われるが、ところどころわずかに残るのみであった。また現畑地の場所も同様に水位が高く、以前は水田として利用されていたことがうがえる。幅約30cmほどの浅い溝が一条検出されたが、遺物はなく、時期は不明であった。



図2 知原地区 調査区配置図

(2) 居屋敷地区

同地区は、沖代条里の南限、推定古代官道沿いに位置しており(図7の⑦)、病院建設に伴い発掘調査を実施した。調査は重機による掘削とし、トレンチを4本設定しておこなった。現地は近年道路舗装時にあわせて盛り土をしており、表土より約110cm下で地山面に到達した。その結果、官道沿い及び西側は搅乱が著しかったが、北側で住居跡を確認したため、建物建設部分にあたる北側部分のみ拡張して調査を実施した。

遺構

検出した遺構は堅穴住居一基、溝2条、ピット群である。(図3、図4)

堅穴住居SH-1は東側が調査区外にかかるため、全形は不明であるが、南北長4.5mの方形で、深さは約25cmであった。住居の南壁はベッド状の高まりがあり、北と南のコーナーには細い溝があつていた。床面には黄白色粘土の貼り床が確認された。Pit1と2は住居の主柱穴であろう。住居の西壁にはカマドが造られており、Pit3はその煙だしの穴であろう。カマドの残りは余り良くなく、両そでの粘土がかろうじて残存していた。カマド部分には焼土と炭が堆積していた。

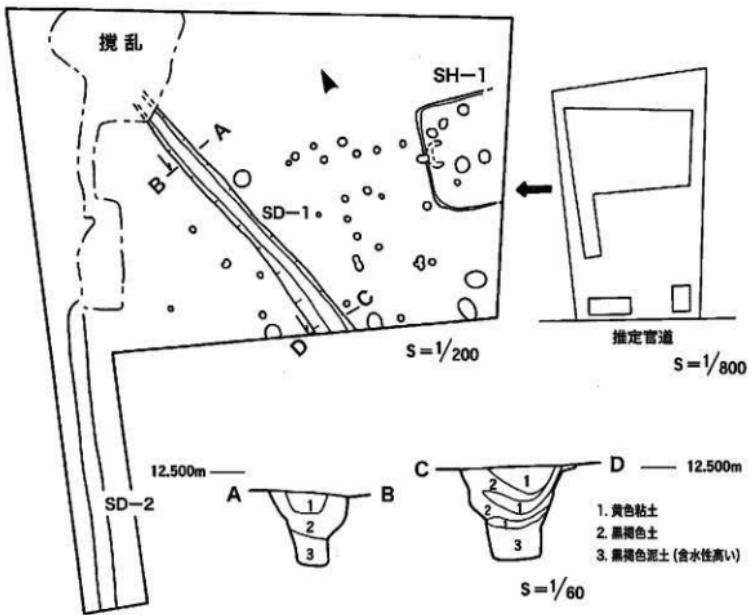


図3 居敷地区 遺構配置図・土層図

溝SD-1は南北にのび、北は後世の擾乱で埋され、南は調査区外に続く。幅は1m~1.5m、深さは深いところで約1.2mある。溝の断面は二段掘り状の逆台形で、底には含水性の高い黒褐色泥土が堆積しており、土器片が数点落ち込んでいた。上層は黒褐色土と黄色粘土からなり、溝を人為的に埋めたと考えられる。

SD-2は断面方形の浅い溝で、15世紀末から16世紀初めの瓦質土器の破片、陶磁器片、土師器片が出士した。当時の屋敷に伴う溝であろう。

遺物

第5図1~6はSH-1の一括資料である。1、2は須恵器の壊身である。1は口径12.0cm、受け部径14.8cm、器高4.0cmを測る。口縁部は短く内傾し、体部下半にへら削りをほどこす。2は1より一回り小さく、口径11.2cm、受け部径13.3cm、器高3.7cmである。口縁部は短く内傾し、体部下半にへら削りをほどこす。1、2ともへら削り後は未調整である。この2点は2の上に1を重ねる状態で、床面より出土した。いずれも完形品であるが、口縁部がところどころ欠けており、故意に欠けさせたものかは興味を引くところである(註1)。

3、4、5は土師器の甌で、3は甌内、4、5はその周辺で出土した。3は口径21.5cm、器高36.6cmで、長胴の体部に短く外反する口縁部がとりつく。外面は大変丁寧な刷毛目調整をほどこし、器面の保存状態はきわめて良好である。内面は下から上へ指削りの後、下半は縱方向の刷毛目、上半は横方向の刷毛

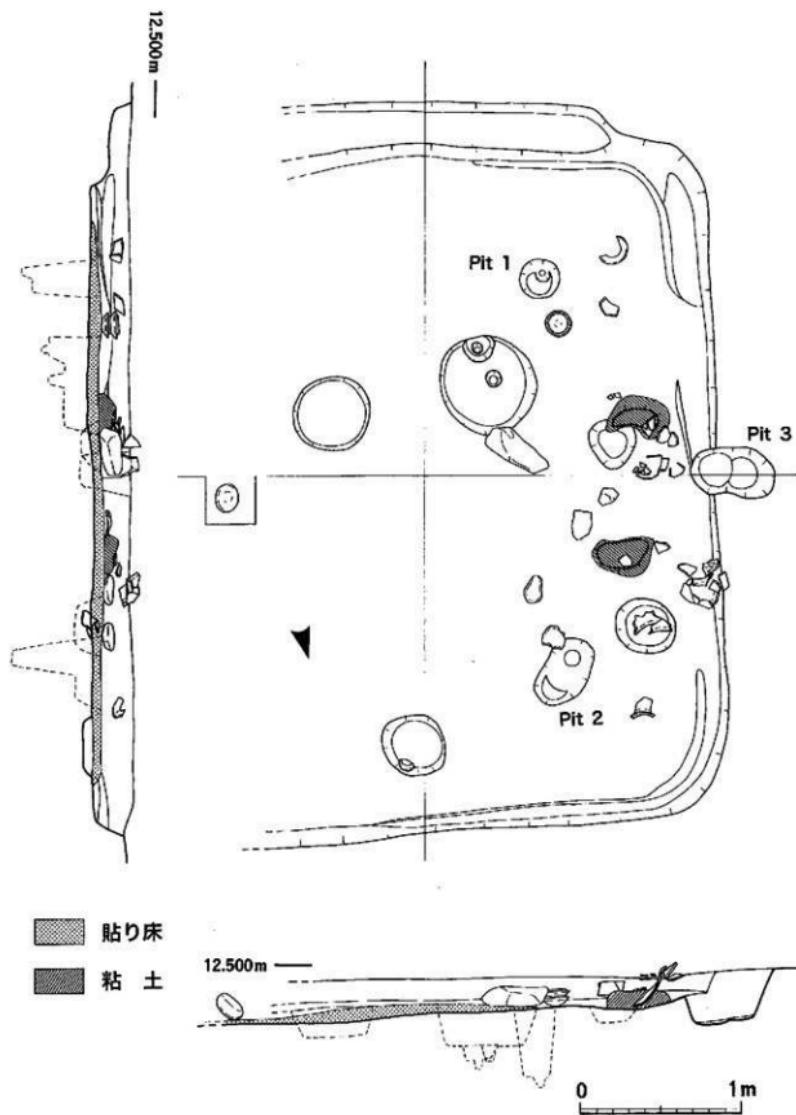


図4 SH-1平面図・断面図

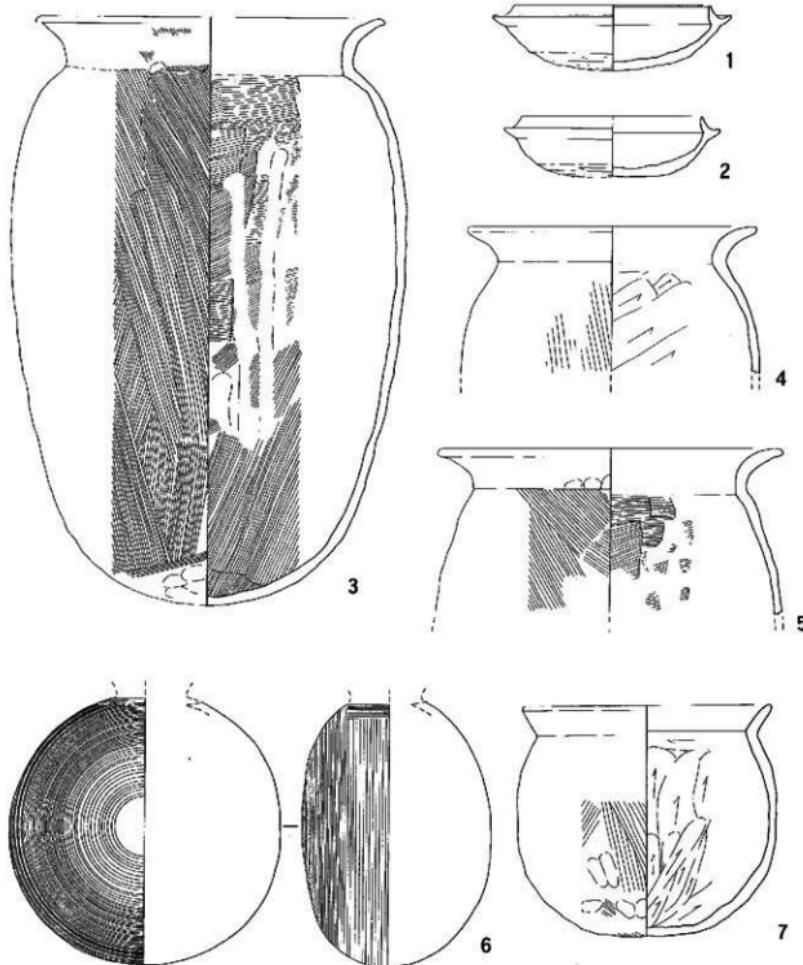


図5 層屋敷地区 出土土器 (S=1/3)

目をほどこす。底部外面は丁寧になでている。胴部外面には煤が付着する。4は口径17.9cmの甌で、外面は荒い刷毛目調整。内面はへら状工具による削りである。内外面とも全面に煤が付着し、黒褐色を呈す。5は口径21.4cmの甌で、外面はななめ、内面は横に刷毛目調整。この一点のみ胎土に非常に多くの金色の雲母粒を含む。雲母粒を多く含む土器は県内では国東半島と大分市周辺に多くみられ、胎土は中津の在地のものではない(註2)。6は須恵器の提瓶で、胴部最大径16.7cm。口縁部のみを欠く。胴部は

両面ともカギ目調整をほどこす。提瓶の取っ手は退化している。住居跡の東の床面から出土した。

7はSD-1出土の土師器壺で、外面は底部を含めて全面に荒い刷毛目を施す。内面は下から上へ指削り後、木調整。内面に煤が多量に付着している。

まとめ

住居跡出土の上器1～6は須恵器の形態より6世紀後半に比定できる一括資料である。SD-1出土の土器も同時期と見て良い。現地の地山面は北側の水田面より若干高く乾燥しており、古墳時代後期集落の存在が予想される。SD-1は集落に伴う溝と考えられる。昨年度調査した市木地区(図7の⑧)では同時期の水田が確認されており、両遺跡は水田と、その水田をたがやす人々の集落として、セットでとらえることができよう。

3. 沖代条里の概要

図7では、字図と、資料館に収蔵してある1960年ごろの航空写真を参考にして、沖代平野で方形の地割りが認められる場所をひろったものである。三口井堰は取水口で、三つの水路にわかつて条里地帯をうるおす。⑩は白鳳寺院の相原庵寺、⑪は沖代条里で収穫された米が納められたであろう、推定ド毛郡衛正倉の長者屋敷遺跡(註3)、⑫は古代の駅の推定地字清水である(註4)。また①～⑨までは近年発掘調査を実施した場所で、1、6、8、9は数字がつく地名の数字のみを記したものである。

沖代条里がどの時期に、どこまで施行されていたか、いまだ解明されていない。以下試みに、条里の坪の復元を手がけてみた。

図7中、方形区画の東を限る黒の曲線はド毛原台地との境にひいたもので、この線より東側は台地となり、条里の東の境界線である。南は推定古代官道を限界とする。官道沿い北側では現在も方形の水田が並んでおり、字も方形を躰製したものが多いため、道をはさんで南になると、転して字の形は不規則になる。ただし、道の南側でも、東部に水田が方形をなす部分がある。また西側は川の近くであることから、地形の乱れが著しく、どこまで条里が施行されたかを知るのは難しい。現在の山国川の右岸に古川、下古川という字(網かけ部分)が細長くのび、旧河道であることから、それより西に展開しないことは確実である。北は線路の北側を東西に走る現在の県道が境になろう。官道を南限とし北へ一、二条と数えていくと県道はちょうど四条の里界線にあたる。これより北の水田は条里部分とは軸がずれる。図7中、東西方向の里界線を太実線であらわした。網をかけている方形の区画の坪を図6のように香ノ園式に数えれば地名よりひろえる数字1と9があつてはまり、その下の区画では28の場所に8の地名があつてはまるところから、これにのつとり南北方向の里界線を点線であらわしてみた。しかしこれはあくまで根拠の弱い私見であることを断っておきたい。

4. 近年の調査と今後の展望

さて、沖代条里は急速な開発でその姿が破壊されつつあることはすでに述べた。開発の情報がはいると、後から追うように発掘を行なうのが現状である。開発は一つの坪内で行われることが多く、坪境を調査できる機会は極めて少ない。たまに複数の坪にまたがっていても、坪境には水路が通ることが多いため発掘できない。発掘調査で条里の小畔群を検出するのは極めて困難で、大駐畔の検査につとめるのが限界であろう。しかし、畦畔の復元は難しくとも、また坪内のみの小規模な調査であっても、得られる情報はある。以下、近年の発掘調査で確認できたことをまとめてみた。

31	32	33	34	35	36
30	29	28	27	26	25
19	20	21	22	23	24
18	17	16	15	14	13
7	8	9	10	11	12
6	5	4	3	2	1

図6 坪割り図



図7 沖代条里全体図 (S = 1/25,000)

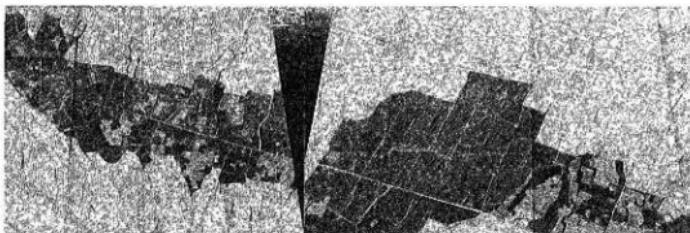
まず、条里の北限についてであるが、昨年度発掘調査により興味深い資料が得られている。県道の拡幅工事に伴い、県から依頼を受け、中津市教育委員会が一部試掘調査を実施した(図7の①)。その際、東西に伸びる溝と、それに伴う杭列を検出した。採取した遺物は18世紀後半の陶磁器であった。その後、県文化課により、本調査が実施されており、報告書の刊行が待たれる。また、同年、中津市教育委員会は、そのすぐ北側の扇城高校のグラウンドで校舎建築に先立つ発掘調査を実施した(図7の②)。付近は以前ハス畑といわれていた場所で、調査の結果も、泥土を確認したのみで、なんら水田の痕跡は認められなかった。故に、さきに確認された東西方向の溝は水田地帯の北限であったのではないかと推察するにいたった。県道が条里の北限をほぼ踏襲していることは、字図より推察するのみであったが、考古学的に証明できたのではないだろうか。

⑥の市木地区では古墳時代の水田に伴う水路が確認できた(註5)。水路脇では水田祭祀の痕跡かと思われる須恵器がまとまって出土している。このあたりは地下水位の非常に高い強湿田で、青灰色粘土層である。周辺の水田でも耕作時に須恵器の破片が採取できるという。同様の土壤は⑨の坂本地区でもうかがえる(註6)。④の知原地区でも水位が高く、すぐ南に隣接した現在の沖代小学校プール(図7の⑤)建設の際、弥生時代の水田を発掘し、弥生人の足跡を検出している(註7)。

⑦は今回発掘した居屋敷地区である。官道沿いの湯屋のあたりは周辺よりやや土地が高く、現在水田の場所でも、灌漑をしなければ水田耕作は不可能な土壤であるが、沖代平野への灌漑水路の取水口近くにあたるため、水に困ったことはないという。灌漑水路の成立と水田の開発が密接に関わった場所である。③の小倉地区(註8)、⑥の高田地区(註9)も水位は低く、水路への依存度の高い地区である。これらからは中世の遺物は採取できたが弥生時代や古墳時代の遺物は確認できていない。

沖代条里内では、東側が地下水位が高く、また弥生、古墳時代と早くより水田開発が行われていた場所である。一方官道沿いと西側は灌漑水路の開発とともに水田化した場所と推察され、発掘調査で条里開発の歴史をつかむには、西側部分の調査が鍵を握るのではないかだろうか。また、当然のことながら、今後水田開発の解明には水利調査は必須である。

中津市教育委員会では、古景観復元の足がかりとして、本年度より、法務局に残る明治21年、22年字図の復元作業を開始した。幸いなことに中津市では中野政喜氏(現中津市文化財調査員)のご努力により小字境図は完成している。現在氏の作成した字界図をもとに2,500分の1の地形図に明治の土地利用をおとす作業を続行中である。本年度は大字 高瀬、湯屋、相原、永添の復元作業をおこなった。土地利用図の観察によって現在では消えてしまった多くの情報を得ることができる。条里内の微高地の探索にも有効であろう。今後はこの作業を条里の範囲のみならず、中津市全体にひろげていけば今後の発掘に大きく役立つことと思う。条里の復元は非常に困難であるが、ひとつでも多くの情報をひきだせるようつとめていきたい。



明治の土地利用図

- (註1) 村上久和氏(大分県教育委員会)の御教示による。
- (註2) 村上久和氏(大分県教育委員会)、塙地潤一氏(大分市教育委員会)の御教示による。
- (註3) 中津市教育委員会平成7年度、8年度調査。
- (註4) 日野尚志氏(佐賀大学教授)の御教示による。
- (註5) 中津市教育委員会『沖代地区条里跡 福島遺跡東入垣地区』「中津地区遺跡群発掘調査概報(VII)」1996
- (註6) 中津市教育委員会平成6年度調査。
- (註7) 大分県文化課・中津市教育委員会昭和57年度調査。
- (註8) (註5)に同じ。
- (註9) (註5)に同じ。

[参考文献]

大分県教育委員会『大分県史古代編』1982

中津市史刊行会『中津市史』1965

八賀晋『田染、上野の水田開発と条里制』『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 研究紀要4』1987

大分県教育委員会『宇佐大路・宇佐への道調査一』『大分県文化財調査報告 第87輯』1991

第3章 福島遺跡東入垣地区(II)

1. 調査に至る経緯

当遺跡は中津市の南西部、標高27m程の台地上に立地する。この遺跡は、面積約130,000m²で、その九割近くが畠地である。しかし近年、個人住宅が建ち始めている。このため事前の発掘調査で遺跡の広がりなどを明らかにすることが急務となっている。

これまで平成6年度より2回にわたる確認調査を行っている。平成6年度は、福島台地の入垣貝塚で周知される南側(字桙垣)の畠地を調査した。土壤稟一基、縄文～中世に至る土器片を検出した。平成7年度は台地の東側(字東入垣)を調査した。この調査では遺跡の性格をより明らかにするために、遺構を検出すれば一部掘り下げる前提とした。その結果、弥生時代の溝一条、土牆一基、古墳時代～平安時代に至る遺構(住居跡、土壙など)を検出できた。特に弥生時代の溝からは、破砕された大量の弥生土器が出土した。この溝状遺構は台地の東側より南北方向に続いていた。そこで今年度は、この溝の続きを探すため昨年度の調査区の約40m北西部の畠地を調査の対象とした。

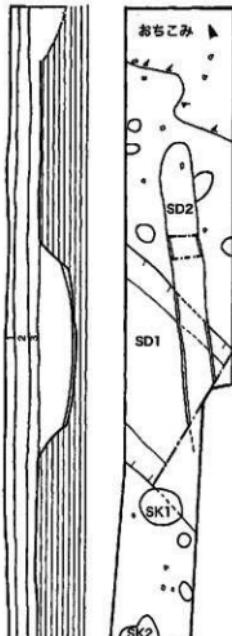
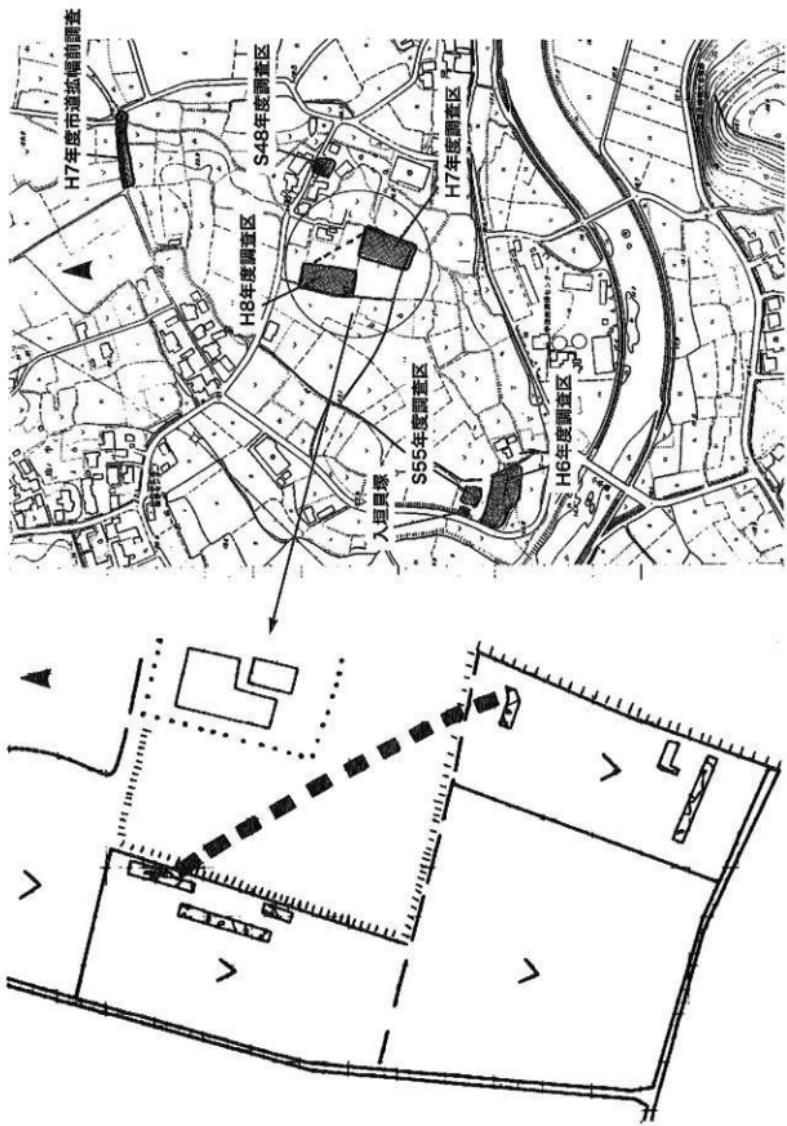


図8 東入垣地区1トレンチ ($S=1/80$)

(S = 1/5,000)

図 9 福島台地周辺地形図

(S = 1/800)



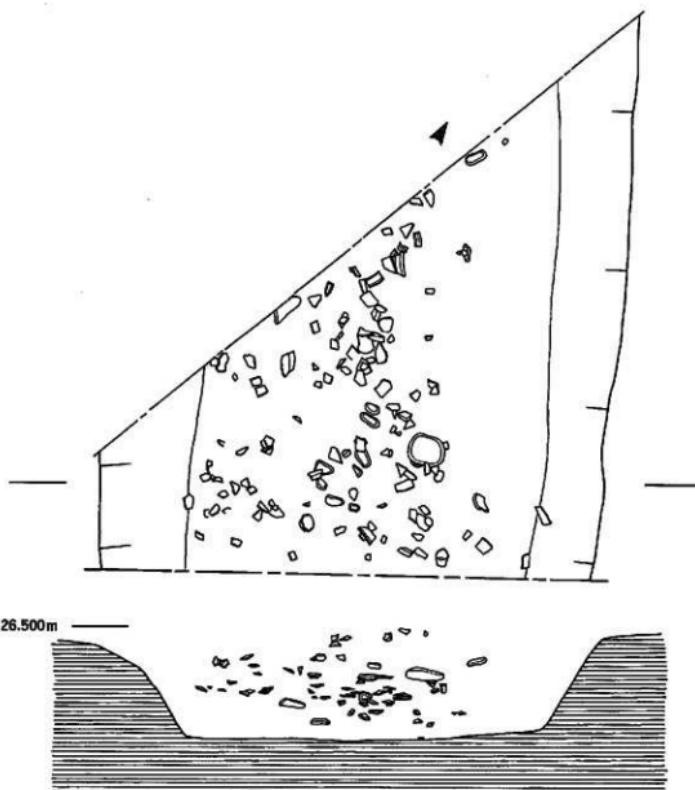


図10 SD-1 平面断面図 ($S = 1/30$)

2. 調査の概要

調査は $2 \times 5\text{m}$ のトレンチを3本設定して行った。遺構を確認できればトレンチを拡張した。前年度の調査を踏まえ、溝状遺構がほぼ直線に続くことを想定し、調査区を畑の東端部に集中させた。

表土より $20\text{cm} \sim 30\text{cm}$ ほどまでは現耕作土であった。それより下は褐色のしまった土で、土師質土器の破片を少し含んでいた。3層は暗褐色土層で、弥生～中世に至る土器片を含んでいた。この層を除去すると黄褐色の地山に達し、この層より遺構の掘り込みを確認できた。これらはすべて前年度調査地とほぼ同じ状況であった。その結果1トレンチの中央部に弥生時代の溝、一条を検出できた。この一部は奈良時代と思われる浅い溝に切られていたが、残りはよく數十点の弥生土器片を検出することができた。2トレンチからは溝一条(時期不明) ピット多數、土壙二基、3トレンチからピット二つであった。なお遺構検出時溝状になるとと思われる遺構のみ掘り下げたので、他の遺構の時期、性格は不明である。

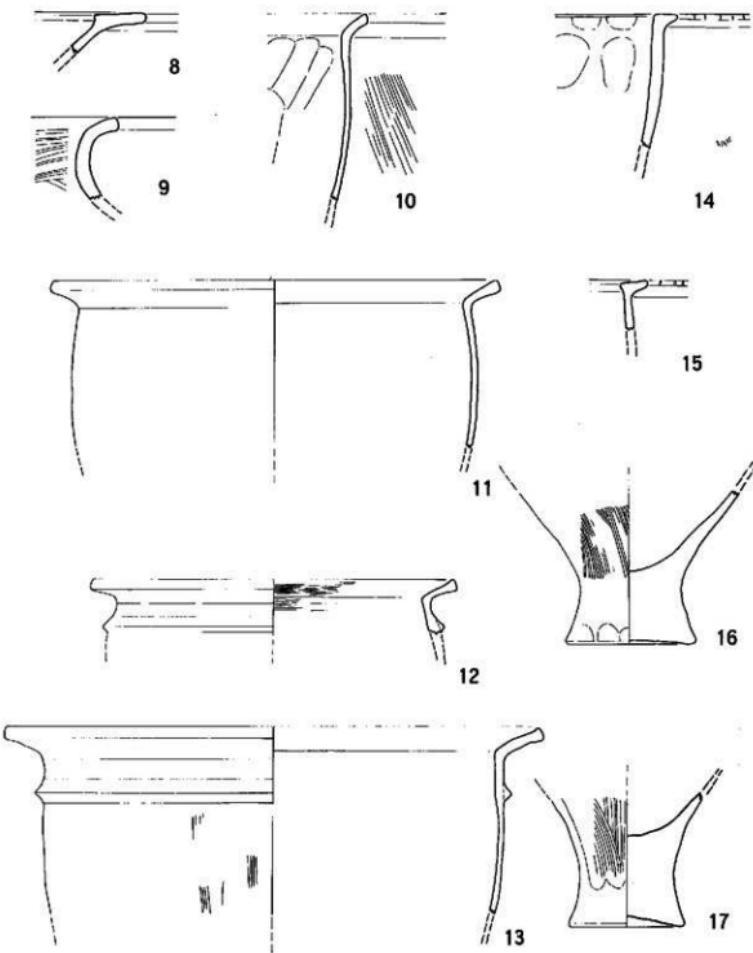


図11 東入垣地区出土遺物 ($S=1/3$)

(1) 弥生時代

遺構

1トレンチ中央部から溝状造構 (SD-1) を検出した。溝はさらに南北方向に進むと思われる。溝の断面は方形、幅約2.7m、深さ60cm程であった。土層は暗褐色粘質土で、底には黄褐色まじりの黒色土が少したまっていた。出土遺物はほとんどが壺で壺と思われるものは数点であった。また、石器は1点も検出されなかった。

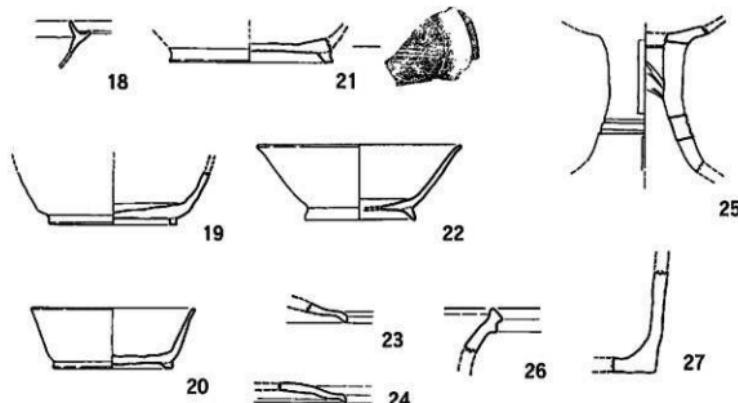


図12 東入垣地区出土遺物 (S=1/3)

遺 物

1~3トレンチの3層より弥生土器が出土している。8は未発達な鋤先状口縁で壺か高杯になるものと思われる。また今回、図示していないが胴部、口縁部に木の葉の紋を施すものが数点検出されている。

溝からの出土遺物は、前年度に比べ数は少なく、復元できるものもなかった。9は壺になると思われる。口縁部内側に丁寧なみがきを施す。10~17は壺になると思われる。10は胴部からほぼ同じ厚さの器壁を保ちながらゆるやかに外反する。外面は粗いハケ目を施す。11~13は口縁部を「く」字に外反させる、城ノ越系のものである。11は復元口径27.6cm、内外面とも調整は不明である。12は口縁先端部が跳ね上がり状になり、口縁部直下に一条の突帯をはりつける。13も12と同じで口縁部先端をやや跳ね上げ、口縁部直下に一条の突帯をはりつける。復元口径33cmである。14は口縁部が短く折れ、断面三角形状をなす。口縁端部に刻み目を施す。15は口縁内部が短く突出している。また14と同様、口縁端部に刻み目を施す。14、15は、北九州地方の亀ノ甲様式に酷似する。16、17は壺の底部になると思われる。16はほぼ平底、17はやや上げ底になる。ともにハケ目を施す。以上、多少時期はばらつくが、前年度出土遺物とほぼ同時期であると思われる。

(2) 古墳.奈良.平安時代

遺 構

1トレンチで浅い溝状遺構(SD-2)と思われるものが検出された。幅約60cm、深さ15cm程で南東より北東方向に続く。一部、弥生時代の溝と重なるが、遺構検出面ではっきりとらえることができた。黄褐色の土がたまっていた。

遺 物

溝状遺構より出土した遺物は細片が多く図示できるものは、わずかに1点である。23は須恵器の壺蓋である。口縁部は水平にのび屈曲して垂下する。口縁端部は丸味をもつ。

その他（3層出土遺物）

18～21は須恵器の坏身である。18は坏身の口縁部である。立ち上がりはやや内傾し、受け部は上外方にのび、端部は丸い。19はやや内側に垂下する高台をもつ。体部は若干内湾気味に上方に伸びると思われる。20の高台はやや外側に垂下する。口縁部は外反する。復元口径は10cmである。21もやや外側に八の字形の高台をもつ。底部に板口を残す。22は上師器である。内側に八の字形の高台をもち、口縁部を外反させる。器高4.6cm、復元口径12.6cmで、9世紀後半のものと思われる。24は須恵器の坏蓋である。口縁部は水平にのび、屈曲して垂下する。口縁端部は断面逆三角形を呈す。26は器の口縁部になると思われる。口縁端部でやや張りだし、若干上方にのびる。25は高坏の脚部である。脚上位と下位に1ヶ所ずつ、孔を穿つ。また中位に二条の沈線を有する。27は須恵器のコップ状になると思われる。外面に削りを施す。

（3）まとめ

今年度の調査は福島台地の東側で、前年度調査区とはば隣接していた。今回の調査でも縄文時代の遺物は1点も検出されなかった。これは台地の西側に対し東側は極端に少なく、縄文時代の遺跡分布を再認識させられた。また、弥生時代中期の溝の続きを検出できたのは大きな成果であった。溝からの出土遺物、溝の形態などから前年度の続きを考えて間違いないであろう。この溝はさらに南北方向に進むと思われ、今後はこの溝の北限を探ることが必要であろう。中津市内では、弥生の環濠集落は例がなく、この溝をどの様にとらえるかが今後の課題である。

[参考文献]

- 『台ノ原遺跡』「大分県文化財調査報告 第33集」大分県教育委員会 1975
- 『弥勒守』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989
- 『沖代地区条里跡福島遺跡東入堀地区』「中津地区遺跡群発掘調査概報(VI)」中津市教育委員会 1996
- 『洞ノ上遺跡群 I』「中津市文化財調査報告 第6集」中津市教育委員会 1988
- 『棒垣遺跡ホヤ池窯跡』「中津地区遺跡群発掘調査概報(VII)」中津市教育委員会 1994

図版1 沖代地区条里跡



居屋敷地区全景

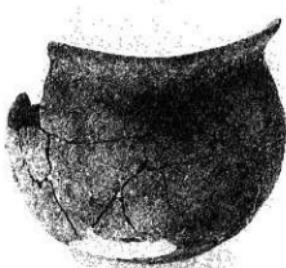
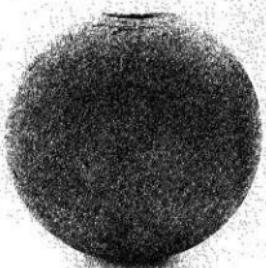
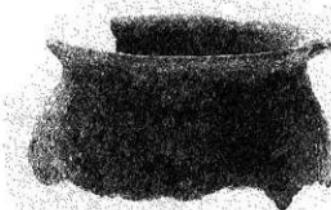
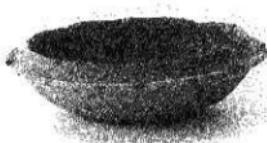


SH-1



SD-1

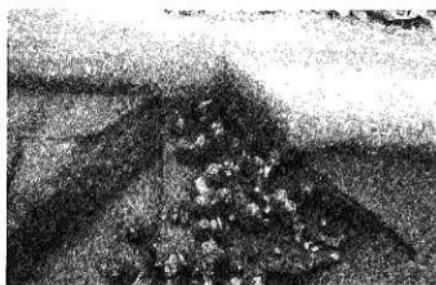
图版2 沖代地区条里跡



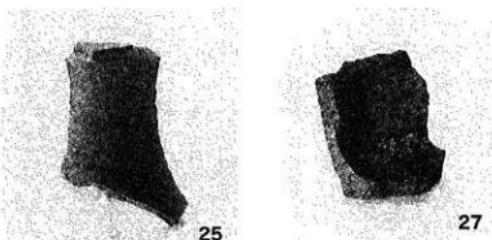
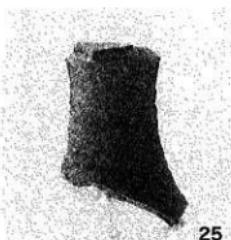
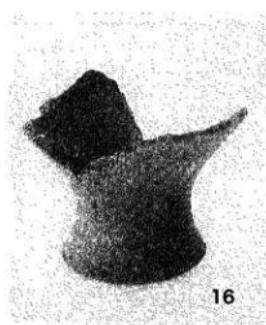
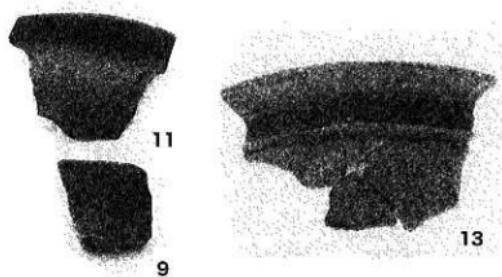
図版3 福島遺跡東入垣地区



発掘風景



SD-1 遺物出土状況



報告書抄録

ふりがな	おきだいちくじょうりあと ふくしまいせきひがしにゅうがきちく							
書名	沖代地区条里跡(II) 福島遺跡東入垣地区(II)							
副書名	1996年度中津地区遺跡群発掘調査概報							
卷次	(IX)							
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	高崎章子 花崎徹							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日	1997年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沖代地区条里跡 知原地区	大分県中津市 中央町2-798-1	44203	101007	33° 35' 46'	131° II'	19960708	1,236m ²	宅地造成
居屋敷地区	大字湯屋273-1			33° 34' 18'	131° II'	19960417 19960507	869m ²	宅地造成
福島遺跡 東入垣地区	大分県中津市 大字福島1335	44203	101051	33° 33' 17'	131° I' 58'	19970123 19970331	900m ²	確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沖代地区条里跡 知原地区	水田	中世?	水田	須恵器				
居屋敷地区	集落	古墳時代	住居・溝	土師器				
福島遺跡 東入垣地区	集落	弥生～奈良	弥生中期の溝	弥生土器 須恵器 土師器				

沖代地区条里跡(II)
福島遺跡東入垣地区(II)

1996年度 中津地区遺跡発掘調査概報(IX)
中津市文化財調査報告 第18集

1997年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 (株)川原田印刷社